

機関番号：13601
 研究種目：研究活動スタート支援
 研究期間：2009～2010
 課題番号：21820016
 研究課題名（和文） セラーズ哲学の全体的解明をめざして：ブランダム／マクダウエルとの比較を通じた考察
 研究課題名（英文） A Study on the Philosophical System of Wilfrid Sellars

研究代表者
 三谷尚澄 (MITANI NAOZUMI)
 信州大学・人文学部・准教授
 研究者番号：60549377

研究成果の概要（和文）：

本研究は、20世紀アメリカの哲学者、ウィルフリッド・セラーズの哲学について、知覚、感覚印象、意図的行為といったキーワードを中心にした分析を行い、その成果として、「機械論的に記述される因果的世界の中に暮らす人間が、それと同時に概念を操り、無色透明の微粒子的世界（世界の科学的イメージ）の中には現れない「色」や「音」といった感覚印象をもち、「意志」をもって自由に行為するとはいかなることであるのか、を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

In this research I took up and analyzed the philosophy of a 20th century American philosopher, Wilfrid Sellars. The main focus of the research was on the theories of perception, sensory impression, and intentional action developed by Sellars, and it revealed the way in which Sellars came to the conclusion that the episodes or states placed in the space of reasons are *sui generis*, hence irreducible to temporal-spatial-causal explanation of natural science in 'the realm of law.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 1,050,000 | 315,000 | 1,365,000 |
| 2010年度 | 950,000 | 285,000 | 1,235,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,000,000 | 600,000 | 2,600,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：西洋哲学、セラーズ、ブランダム、マクダウエル、心の哲学、知覚、志向性

1. 研究開始当初の背景

英米圏を中心に、セラーズの哲学への注目はかつてないほどに高まりつつある。セラーズの全体像をバランスよくおさめた論文集(*In the Space of Reasons* [2007])、主著「経験論と心の哲学 *Empiricism and the Philosophy of Mind*」[1956]への詳細なコメントリー(deVries & Triplett, *Knowledge, Mind, and*

the Given [2000])、その全体像をめぐる優れた水準での総括的研究(W. deVries, *Wilfrid Sellars* [2005], J. O'shea, *Wilfrid Sellars*, [2007])など、本格的・体系的なセラーズ研究にとりかかるためのアプローチ・ルートは着実に整備されつつある。

このようなセラーズ哲学の復権を後押ししている事情として、現代の英米圏において

最も盛んに議論されている驚くほど多様な問題の思想的源泉に、セラーズの強力な哲学的体系が位置している、という点を挙げておくことができる。具体的には、(1)ピッツバーグ大学におけるセラーズの後継者たちが展開する斬新な「志向性」の理論(Robert Brandom と John McDowell)、(2)「経験論と心の哲学」における「ジョーンズの神話」を原型とする「心の『理論』理論(Theory of mind)」と「心のシミュレーション説」の対立、(3)David Chalmers を代表に、最新の認知科学が提供する知見と伝統的なデカルト主義の発想を両立させることを試みる「自然主義的二元論 Naturalistic Dualism」の台頭、(4)「心の哲学」における「反表象主義」(Richard Rorty)、(5)「消去的唯物論」(Paul Churchland)、(6)「機能主義」(William Lycan)、(7)「道具主義」(Daniel Dennett)、の主張など、現代英米哲学において最も中心的な論争の場所となっているきわめて多様な問題の源泉にセラーズの哲学が位置しているのである。

しかし、あるセラーズ研究者が指摘する通り、上記(1)~(7)の現代哲学における主要な諸立場のあいだには、「セラーズが知的祖先であることを除いては、実質的な意見の一致をまったく見出すことができない」(Garfield [1989])ほどの隔たりがあるように思われる。そして、この事実から、私の考える研究計画の必要性が逆説的に強調される。すなわち、「これほど多様な哲学的立場がみなセラーズの影響下に成立していることは分かった。しかし、本当のセラーズは一体どのようなことを主張しているのか」という問いに明確な回答を与える必要性が強調される。

本研究は、こういった広範な背景の中、とくに上記(1)と(4)の動向に注目し、セラーズ哲学の全体的解明に向けた一步を踏み出そうと試みるものであった。

2. 研究の目的

以上の背景のもと、研究代表者は、最低10年を単位とする長期的目標として、セラーズ哲学の全体像を詳細に渡って明らかにすることを目指して研究を遂行してきた。そして、本研究は、このより大きな計画の一環として、次の点の達成を目指した。

(1)セラーズ哲学の全体像を解明する予備的段階として、概観的なレベルでの包括的踏査を行い、主要な論点をめぐる基本的な議論をバランスよく紹介する日本語資料を作成すること。(2)ロバート・ブランダムとジョン・マクダウエルという二人の代表的後継者との比較を通じて、知覚論の分野においてセラーズが行う「志向性」分析の特性を明らかにすること。

3. 研究の方法

本研究は、以下のような方法のもとに遂行された。

(1)セラーズ第二の主著『科学と形而上学』や中期・後期のセラーズに属する主要論文など、日本ではほとんど知られていない文献を網羅的に踏査し、比較的内容の知られている論文、「経験論と心の哲学」や「科学的イメージ」論文以外の文脈におけるセラーズの姿を強調する仕方でサーベイを行う。

(2)セラーズの哲学のうち、知覚論の分野において行われる志向性の分析について、ブランダムとマクダウエルとの比較を通じてその特性を明らかにする。セラーズ、ブランダム、マクダウエルの主要テキストが一次資料とされるが、より堅実に研究を進展させる目的で、信頼すべき先行研究を整理・検討した内容を反映させつつ論文を作成する。

(3)「カント主義者としてのセラーズ」という、これまで見逃されつづけてきた論点を明確に提示する。マクダウエルによるセラーズとカントとの比較を出発点として、とくに「直観」と「感性の非概念的受容性」をめぐるセラーズ自身の洞察へと考察の範囲を広げ、それらの成果を総合する形でセラーズのカント主義的知覚論が有する特色を明らかにする。

4. 研究成果

(1)先述の通り、「知覚」、「規範」、「志向性」、「意味」、「感覚印象」など、セラーズ哲学の中核に位置する諸概念について、複数の著作・論文を横断的に見通した堅実な紹介と検討を行った研究は、国内ではいまだゼロであるといわざるをえない状況であった。このような状況の中、本研究は、日本語によるセラーズ研究の基礎資料を提供する、という成果を達成した。この点において、本研究には、国内におけるセラーズ研究の基盤整備を一步前進させた、という重要な意義を認めることができる。

(2)セラーズとマクダウエル／ブランダムとの間にどのような関係があるのか、というテーマは、国外においても意外なほど掘り下げた研究が行われていない状態にあった。本研究は、二人の後継者とセラーズとの違いを明確にする、という課題を一步前進させることに成功し、セラーズ研究として期待される成果を残すのみならず、主たる関心がマクダウエル／ブランダムという二人の哲学者に向けられている研究者にも、貴重な情報を提供するという成果を収めることができた。

(3)総合的に述べるなら、ブランダム／マクダウエルの双方から過不足なく距離をとった視点のもとにセラーズの姿を描き出すことを試みることによって、本研究は、より広範な文脈の中にセラーズを位置づけ、より包

括的でより奥行き深い総合的セラーズ像を提出するという先行研究の達し得なかった成果を達成した。とくに、セラーズにおける「意図」概念を中心とした実践的推論の構造分析に注目した研究は、英米圏においてもまだ研究のとくに手薄な状況にある話題であるが、本研究はそのテーマにも踏み込んだ仕方でセラーズ哲学の有り様を明らかにする、という成果を達成した。

(4) 本研究が明らかにしたことを、以下、具体的内容にまで踏み込んで報告しておく。

セラーズとマクダウエルの関係は複雑である。1980年代中盤から後半にかけて、セラーズのいう「理由の論理空間」に言及したマクダウエルの論考が姿を現し始め、92年のロック講義(94年に『心と世界』として出版)においては、ストローソンと並ぶ大きな影響の源としてセラーズの名前に言及がなされている。その後、スノードンやマーティンとならび、マクダウエルもまたその旗手として知られるようになる「知覚経験の選言主義的理解」の提唱と並行しつつ、マクダウエルのセラーズに対するとりくみは熱心さの度合いをます。98年のウッドブリッジ講義(「世界を視野のうちに留めること」)はマクダウエルと「セラーズのカント」との正面からの対決を記録したドキュメントであるが、そのウッドブリッジ講義と同名のタイトルを付された2009年の論文集は、ある意味でマクダウエルによるセラーズ研究を特集した本として位置づけることができるほどである。

しかしながら、もちろんのこと、「セラーズ主義者」としてのマクダウエルの自己規定は、マクダウエルが忠実に正統なセラーズの後継者であることをまったく含意しない。マクダウエルのセラーズに対する取り組みは、ある意味で、二人のあいだに存する距離ないし断絶の在り処を突き止める試みの連続であった、と特徴づけることもできるほどである。

マクダウエルとセラーズの関係は、大略以下のような変遷をたどる。

① McDowell[1994]において、「経験論と心の哲学」が感覚経験の志向性を「科学主義」的立場から理解している点を批判する。② 98年のウッドブリッジ講義(=McDowell[2009a]所収)において、Sellars[1967]を検討することによって以前の「科学主義」批判を撤回する。理由の空間に帰属する、つまり、概念内容を持ち、志向的経験と非志向的経験を区別する「線」の「上」に属するかぎりにおける知覚経験(カント的直観)に関するセラーズの立場は、これをみずからの見解に合致するものとして評価する。③ 同じくウッドブリッジ講義において、「カント的直観」は「(概念内容を含まない)まったくの受容性」へと

洗練されるべきことを主張する Sellars[1967]の議論が、カント解釈としても志向性問題の哲学的な解決としても誤っていることを指摘する。④ McDowell[2006]において、セラーズの知覚理論が経験の「選言主義」的理解にすでに到達していたことを明言する。⑤ McDowell[2008]において、セラーズの構想力論に注目することの必要性を明言し、98年の批判はセラーズ理解として一面的であったことを承認する。ただし、概念内容をもたない「感覚印象」そのものはたらしめをめぐり批判についてはこれを取り下げない。

また、このように錯綜した変化を示すマクダウエルのセラーズ批判に対しては、Williams[2006]、de-Vries[2006]、Rosenberg[2007]等、いわば「正統派」に属するセラーズ主義者たちが(すくなくとも98年までの)マクダウエルのセラーズ理解を批判し、セラーズの「知覚経験」理解を独自の観点から擁護する議論を展開している。

論者の最終的な関心は、セラーズの主要なテキスト(Sellars[1956]、Sellars[1967]、Sellars[2007]等)を忠実に解釈することと、上述の先行研究の成果を検討することを通じて、「マクダウエルとセラーズの距離」という複雑な問題に一定の見通しを与えることにあった。そして、本研究は、具体的な成果として、以下の点を明らかにした。

① マクダウエルのセラーズ理解は、両者の見解が合致を示すとされる局面(いわゆる「線の上」の段階)においてもそれほど似通ってはいないのではないかと。つまり、マクダウエルのセラーズ解釈は初手から誤った方向をむいていた。② 概念内容をもたない感覚印象の論理をめぐりマクダウエルのセラーズ批判にも、①の段階における誤解を引きずっている側面が認められるのではないかと。つまり、マクダウエルはセラーズ批判をやっているつもりなのだが、彼の批判は実はセラーズ批判としては的外れなものに終わるものであった。③ では、マクダウエルの誤読を離れ、正しく理解されたセラーズの姿を明らかにするとすれば、それはどのようなものであるのか。また、マクダウエルとセラーズを正しく対質させたとき、哲学的にいついずれに軍配があがることになるのか。この問題については、今後のさらなる検討が必要とされるが、本研究はすくなくとも今後の研究の展開のための橋頭保を確保することができた。

また、本研究は、セラーズの哲学について、その「意図(intention)」概念の分析に注目し、そのあり様を見定めた。これは、本研究が二重の意味で聞きなれない、マイナーなテーマを扱うものであった、という印象を与えるかもしれない。第一に、近年の英米圏にお

けるセラーズ再評価の機運や、日本語による『経験論と心の哲学』の出版といった事情などを考慮してもなお、セラーズの思想がわが国の研究者のあいだでメジャーな存在になった、とはいいがたいように思われるからである。また、第二に、セラーズを中心にすえて研究を遂行する研究者共同体の内部においてさえ、実践哲学の領域におけるセラーズの論考は研究上の隙間ないし死角に位置する話題にとどまっている、というのは否定しえないのが現状だからである。

しかし、上記の印象は、本研究がたんなる歴史的関心から「失われた／知られざる巨人」の姿を発掘・復元することだけに狙いを定めるものであった、ということをもまったく含意しない。同世代の分析哲学史を代表するカルナップやクワインとは異なり、「規範的なもの」のあり方に根本的な関心をよせるセラーズにとって、実践哲学への取り組みは彼の哲学体系のうちでも決定的に重要な位置を占める話題だったからである。そして、本研究が明らかにするとおり、セラーズの洞察に満ちた分析の数々は、実践的推論の構造に関心を寄せる研究者にとって未発掘の宝の山を構成している、ということができるからである。

さて、研究代表者の最終的な目標は、「実践理性」の可能性——倫理的思考が論理的・概念的特性をもち、同時に実践的である（事実の記述ではなく行為を指導し、動機づける）こと——を、自然主義的枠組みの内部に留まりつつ追求するセラーズのプロジェクトについて、その全体像を過不足なく見定めてみることにあった。そして、本研究は、その大きな計画の前半部を構成する考察として、(1)セラーズにおける道徳理論の基礎的構造を提供する行為の理論に焦点を合わせた考察を行い、また、(2)それとあわせて、「意図」という優れて実践的な心的状態を論理的語彙として扱い、意図言明を含む推論の論理的構造を明確化するセラーズの議論の概要を見定めた。別の言い方をすれば、直観主義と情動主義を止揚した倫理学説を確立するところにセラーズの狙いは定められているわけであるが、本論文はセラーズの構想する道徳理論を直接的考察の対象とすることはせず、道徳哲学への入り口としての「行為の哲学的心理学」(TA, 105) と実践的語彙を含む推論の「真正に論理的な構造」に焦点をあわせた分析を行った。より具体的には、「意図」を中心におきながら「意志」、「信念」、「欲求」などの構造を分析してみせるセラーズの考察に焦点を合わせた論述を行った。ただし、セラーズの道徳理論は、「べき(ought)」や「よい(good)」によって表現される道徳の文法は、「するつもりである(shall)」によって表現される「意図」の文法の特例として理解さ

れる、と考える点にその特色を見出されるものであり(TA, 106)、その限りにおいて「するつもりである(shall)」の発話によって表出される意図の体系的分析を出発点にとることは、道徳的べきの将来的解明にむけた着実な足場を構築することにつながるはずであり、その点において、本論文にはセラーズにおける倫理思想の全体的な解明、というより大きな課題の達成に向けた重要な第一歩としての位置づけを与えることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 三谷尚澄、「感覚印象」をめぐるセラーズの理解は変化したのか、アルケー、査読有り、第19号、2011(刊行予定)、ページ数未定
- ② 三谷尚澄、セラーズにおける意図の分析について、人文科学論集、査読有り、第45号、2011、1-22
- ③ 三谷尚澄、マクダウエルはセラーズをどう理解したのか? ——「みえるの語り」の選言主義的解釈をめぐる一考察、人文科学論集、査読有り、第44号、2010、1-20

[学会発表] (計3件)

- ① 三谷尚澄、「感覚印象」をめぐるセラーズの理解は変化したのか、関西哲学会、2010.10.17、同志社大学
- ② 三谷尚澄、知覚と直観：感性の受容性をめぐるマクダウエルのセラーズ批判から、日本カント協会、2009.11.21、立正大学
- ③ 三谷尚澄、セラーズにおける意図の分析について、関西倫理学会、2009.11.1、龍谷大学

[その他]

ホームページアドレス

http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/mitani_1/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三谷尚澄 (MITANI NAUZUMI)
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号：60549377